

「小笠原諸島」の世界遺産暫定一覧表への記載について  
< 外務省・林野庁同時発表 >

扱 い	トタ（世界遺産条約関係省 庁連絡会議後）
--------	-------------------------

平成19年1月29日（月）  
環境省自然環境局自然環境計画課  
直 通：03-5521-8274  
課 長：渡邊綱男（内線 6430）  
補 佐：谷川 潔（内線 6491）  
担 当：岡野隆宏（内線 6477）

我が国政府は、1月29日（月）、「世界の文化遺産及び自然遺産の保護に関する条約」（通称 世界遺産条約）に基づく我が国の「暫定一覧表」に、自然遺産として「小笠原諸島」を記載することを決定しました。

- 1．環境省と林野庁では、平成15年に学識経験者からなる検討会を設置し、世界自然遺産の候補地として、平成17年7月に登録された「知床」のほか、「小笠原諸島」と「琉球諸島」の3地域を選定しました。
- 2．残る2地域のうち、「小笠原諸島」について、学識経験者による科学委員会の助言を受けて小笠原諸島の世界自然遺産としての価値を整理するとともに、地域連絡会議において地元の合意が得られたことから、本日開催された世界遺産条約関係省庁連絡会議において、自然遺産として「小笠原諸島」を世界遺産暫定一覧表に記載することを決定しました。
- 3．今後は、外来種対策などについて、地域連絡会議及び科学委員会における議論を踏まえ、推薦に向けて概ね3年程度かけて取組を一層推進し、推薦の際には将来的にも世界遺産としての価値を維持できる見通しをつけることにより、世界自然遺産の登録が実現できるよう関係機関と一体となって努力していくこととします。
- 4．なお、「琉球諸島」については、世界自然遺産としての価値や検討会で課題とされた保護区の設定拡充などの検討、調整を進めることとし、引き続き推薦に向けて取り組んでいきます。



(参考)

## 1. 世界自然遺産候補地選定経緯

環境省と林野庁が、平成15年に学識経験者からなる「世界自然遺産候補地に関する検討会」を共同で設置し、世界自然遺産の新たな推薦候補地を学術的見地から検討。

「知床」、「小笠原諸島」、「琉球諸島」の3地域を我が国における新たな世界自然遺産の候補地として選定。

「小笠原諸島」については、多くの固有種・希少種が生息・生育し、特異な島嶼生態系を形成していることが評価されたが、以下の課題が示された。

### 【課題】

- ・ 外来種対策を早急に講じる必要がある。
- ・ 最も重要な地区の一部は、未だ十分な保護担保措置がとられていない。

## 2. 地域連絡会議と科学委員会の開催経緯

「小笠原諸島世界自然遺産候補地地域連絡会議」

- ・ 小笠原諸島の世界自然遺産登録に向けて、その候補地の適正な管理のあり方の検討、関係機関の連絡・調整を目的として、関東地方環境事務所、関東森林管理局、東京都、小笠原村及び小笠原諸島の保全と管理に関わる地元関係団体で構成する地域連絡会議を設置し、平成18年11月21日に第1回会議を開催。
- ・ 平成19年1月13日に小笠原村で開催された第2回会議において、平成19年1月末に自然遺産として「小笠原諸島」を暫定一覧表に記載するための手続きを進めることについて合意された。

「小笠原諸島世界自然遺産候補地科学委員会」

- ・ 世界自然遺産候補地である小笠原諸島の自然環境の保全・管理等について科学的な見地からの検討を行うことを目的に、学識経験者からなる科学委員会を設置し、平成18年11月29日に第1回委員会を開催。
- ・ 平成18年12月21日に開催された第2回委員会において小笠原諸島の世界遺産としての価値及び外来種対策等の課題について、以下の見解が得られた。

### 【世界遺産としての価値】

- ・ 小笠原諸島は、「地形・地質」「生態系」「生物多様性」に関して世界遺産としての価値を有する。

### 【課題】

- ・ 外来種対策については、推薦の際に、一定の成果を示すとともに、将来的にも世界遺産としての価値を維持出来る見通しをつける必要があり、概ね3年程度しっかりとした対策を行うことが必要。

### 3 . 小笠原諸島の世界遺産としての価値について

小笠原諸島は、世界遺産の評価基準のうち( )地形・地質、( )生態系、( )生物多様性に該当すると考えられる。

#### ( )地形・地質

小笠原諸島は、約4800万年前に形成された父島列島と聳島列島、約4400年前に形成された母島列島、現在も活動中の火山列島と生成時期によりマグマの組成が異なる島弧性火山が並んでおり、プレートの沈み込み帯における海洋性島弧の形成過程を、沈み込みの初期段階から現在進行中のものまで観察することができる世界で唯一の地域であり地球史の顕著な見本である。また、プレートの沈み込み初期に発生した無人岩(ボニナイト)が、地殻変動による破壊を受けずまとまった規模で陸上に露出しているのは、世界でも小笠原諸島だけである。

#### ( )生態系

小笠原諸島は、これまで大陸と一度も繋がったことのない海洋島であり、限られた面積の中で独自の種分化が起こり、数多くの固有種が見られ、陸産貝類や植物、昆虫類においては、今なお進行中の進化の過程を見ることができる。特に陸産貝類は適応放散による種分化の典型を示している。また、乾性低木林は、固有種が数多く見られるとともに、雌雄性の分化や草本の木本化など、海洋性独特の進化様式も観察できる。このように「進化の実験室」ともいえる特異な島嶼生態系が形成されている。

「適応放散」とは、同類の生物が、様々な環境条件に適応して進化し、多様に分化すること。

#### ( )生物多様性

小笠原諸島は、多様な起源の種が混在しているのが特徴であり、植物では「オセアニア系」、「東南アジア系」、「本州系」などが知られている。それらが独自の種分化をとげた結果、小さな海洋島でありながら種数が多く、固有種率が高い。また、オガサワラオオコウモリやメグロなど世界的に重要な絶滅のおそれのある種の生育・生息地となっており、太平洋中央海洋域における生物多様性の保全のために不可欠な地域である。

## 世界遺産条約の概要

### (1) 条約の概要

- ・正式名称：世界の文化遺産及び自然遺産の保護に関する条約
- ・目的：顕著で普遍的な価値を有する遺跡や自然地域などを人類全体のための世界の遺産として保護、保存し、国際的な協力及び援助の体制を確立する。
- ・採択：1972年（我が国は1992年に締結）
- ・締約国数：183ヶ国（2006年10月23日現在）
- ・事務局：UNESCO世界遺産センター（パリ）

### (2) 世界遺産のカテゴリーと登録件数（2006年7月現在）

カテゴリー	対象	登録件数
文化遺産	世界的な見地から見て歴史上、美術上、科学上顕著で普遍的価値を有する記念工作物、建造物群、遺跡を対象	644
自然遺産	世界的な見地から見て観賞上、科学上又は保全上顕著な普遍的価値を有する特徴ある自然の地域、脅威にさらされている動植物種の生息地、自然の風景地等を対象	162
複合遺産	文化遺産と自然遺産との両面の価値を有するものを対象	24
（合計）		830

### (3) 世界自然遺産の登録基準

以下のクライテリア（評価基準）の1つ以上に合致する世界的に見て類まれな価値を有し、法的措置等により、評価される価値の保護・保全が十分担保されていること、管理計画を有すること等の条件を満たすことが必要。（ ）～（ ）は世界文化遺産のクライテリア

（ ）自然景観

最上級の自然現象、又は、類いまれな自然美・美的価値を有する地域を包含する。

（ ）地形・地質

生命進化の記録や、地形形成における重要な進行中の地質学的過程、あるいは重要な地形学的又は自然地理学的特徴といった、地球の歴史の主要な段階を代表する顕著な見本である。

（ ）生態系

陸上・淡水域・沿岸・海洋の生態系や動植物群集の進化、発展において、重要な進行中の生態学的過程又は生物学的過程を代表する顕著な見本である。

（ ）生物多様性

学術上又は保全上顕著な普遍的価値を有する絶滅のおそれのある種の生息地など、生物多様性の生息域内保全にとって最も重要な自然の生息地を包含する。

#### (4) 我が国の世界遺産

現在、我が国では、自然遺産3件、文化遺産10件の合計13件が世界遺産として登録されている。

##### 【自然遺産（計3地域）】

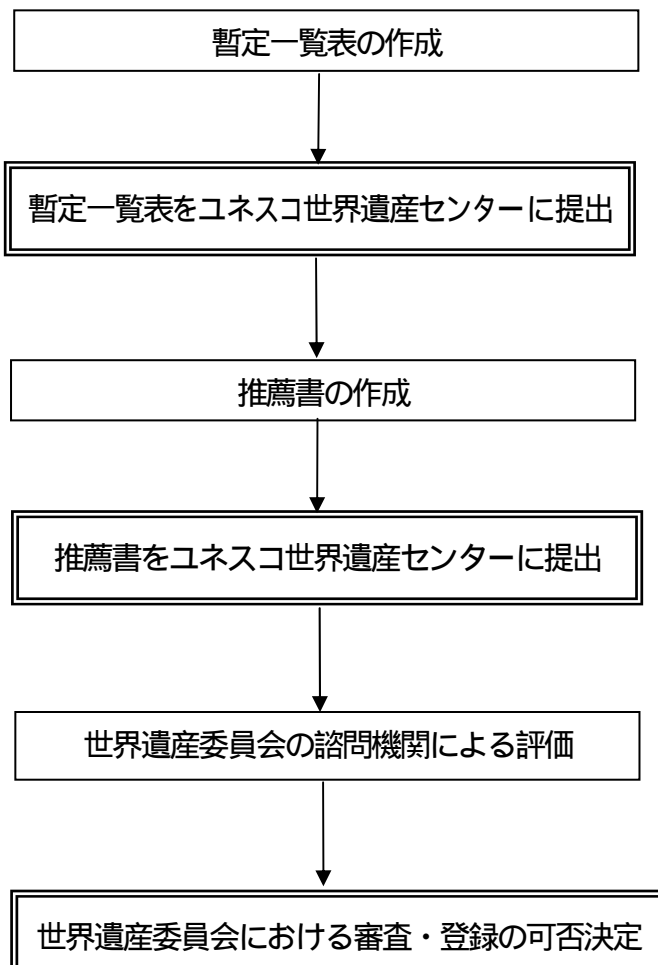
- ・ 屋久島（平成5年）
- ・ 白神山地（平成5年）
- ・ 知床（平成17年）

##### 【文化遺産（計10地域）】

- ・ 法隆寺地域の仏教建造物（平成5年）
- ・ 姫路城（平成5年）
- ・ 古都京都の文化財（平成6年）
- ・ 白川郷・五箇山の合掌造り集落（平成7年）
- ・ 原爆ドーム（平成8年）
- ・ 厳島神社（平成8年）
- ・ 古都奈良の文化財（平成10年）
- ・ 日光の社寺（平成11年）
- ・ 琉球王国のグスク及び関連遺産群（平成12年）
- ・ 紀伊山地の霊場と参詣道（平成16年）

この他、「石見銀山遺跡とその文化的景観」及び「平泉 - 浄土思想を基調とする文化的景観」について推薦書を提出済み

#### (5) 世界遺産登録手続きの概要



##### 暫定一覧表（暫定リスト）

暫定一覧表とは、条約締約国が世界遺産として価値を有していると考え、将来推薦を行う意思のある物件のリストで、少なくとも推薦書提出の1年前までに締約国政府から提出することとされている。

##### 推薦書

推薦書は、締約国が国内の物件を世界遺産に推薦する際に提出する書類で、遺産としての価値を証明するとともに、将来にわたり保全するための方策等を示さなければならない。毎年2月1日が提出の締め切りとなっている。

##### 諮問機関

自然遺産の諮問機関は、IUCN（国際自然保護連合）が務めている。

（推薦書提出の翌年7月頃）



## 世界遺産条約暫定リスト（仮訳）



国名： 日本

提出日：2007 年 1 月 29 日

作成者：環境省、林野庁

物件名：小笠原諸島 (Ogasawara Islands)

地 域：東京都

位 置：北緯 27°05'24" ，東経 142°11' 42"

**物件の説明：**

小笠原諸島は、日本列島南方の北西太平洋に位置し、南北約 400km に渡って散在する島々の総称で、父島、母島、鷲島の 3 列島からなる小笠原群島、火山（硫黄）列島及び周辺孤立島からなる。Udvardy (1975)の生物地理区分では「オセアニア界ミクロネシア地区島嶼混合系（5.2.13）」に属する。日本列島から約 1000km、マリアナ諸島から約 550km 離れており、どの島も成立以来大陸と陸続きになったことがない海洋島である。面積は、最大の島である父島でも約 24km<sup>2</sup> しかなく、大半は 10 km<sup>2</sup> 以下の無人島で、最大標高は南硫黄島の 916m である。父島での年平均気温 23.0 、冬期間でも平均気温は 18.7 であり、年間を通じて温暖である。年間降水量は 1,280mm で、5 月と 11 月に多い傾向になっている。

小笠原諸島には 1830 年まで定住者はおらず、「無人島（ボニン・アイランド）」と呼ばれていた。近年まで無人島であったために海洋島の生態系が良く保存されている。現在は、父島、母島の 2 島で約 2,300 人が生活しており、独特の島の生態系や美しい海に魅せられて年間約 17,000 人の観光客が訪れる。

小笠原群島は約 4800-4400 万年前に形成された島弧火山であり、海洋プレートの沈み込み帯における島弧火山の形成過程の初期段階の記録を陸上で見ることができる世界で唯一の場所である。一方の火山列島は現在形成途中の段階であり、この地域での研究から海洋性島弧が大陸の起源であるとする考え方が生まれた。

また、小笠原諸島の生物は種の起源が多様であり、独自の進化の過程で、多くの固有種を生みだしたばかりか、その多くが絶滅を免れ現存し、今なお進行中の進化の過程を見ることができる。特に、乾性低木林には多くの固有種・希少種が生育・生息しており、種の多様性に富んでいる。また、小笠原諸島は亜熱帯性の海鳥類の重要な繁殖地ともなっている。

## 顕著で普遍的な価値の証明

### 該当クライテリア:

(Please tick the box corresponding to the proposed criteria and justify the use of each below)

(i)  (ii)  (iii)  (iv)  (v)  (vi)  (vii)  (viii)  (ix)  (x)

- ( ) 小笠原諸島は 4800 万年前に太平洋プレートが沈み込みを開始したことによって、海洋地殻の上に誕生した海洋性島弧である。沈み込み始めて間もない小笠原海嶺下のマントルは高温であったため、広範囲に無人岩（ボニナイト）という特異なマグマを発生した。ボニナイトは、地球上で唯一単斜エンスタタイトを含む高マグネシウムの安山岩である。プレートの沈み込みに伴い、生成時期によってマグマの組成が異なる島弧型火山が、約 4800 万年前に形成された父島列島と聳島列島、約 4400 万年前に形成された母島列島、現在も活動中の火山列島と並んでおり、プレートの沈み込み帯における海洋性島弧の形成過程を、沈み込みの初期段階から現在進行中のものまで見ることができる。

小笠原諸島では、岩脈や枕状溶岩、硫化鉄床などによって当時の海底火山形成過程を再現することができる。この島弧形成は活火山群である西之島や火山列島では今も進行中である。また、貨幣石を始めとする熱帯性動物化石群も見られる。

こうした海洋性島弧の形成過程は世界中で起こっている現象であるが、初期段階の地形・地質が地殻変動による破壊を受けず、まとまった規模で陸上に露出しているのは、世界でも小笠原諸島だけである。これは、太平洋プレート上にある海底火山が、フィリピン海プレートに衝突し、その一部を隆起させたためである。

また、小笠原諸島では古くから地球科学的研究が行われてきており、世界で最も研究が進んでいる地域の一つである。近年の精密地震波構造探査によれば、太平洋プレートの沈み込みに伴う島弧火成活動によって、現在青年期にある伊豆 - 小笠原弧の地下では、大陸の基となる安山岩質の中部地殻が形成されつつある。これらの研究により、海洋性島弧が衝突により合体、大型化する過程を繰り返して現在の大陸ができたと考えられるようになった。

このように小笠原諸島は、海洋性島弧の形成過程をその誕生から幼年期を経て現在進行中の青年期まで観察することができる唯一の地域であるとともに、海洋地殻から大陸地殻への進化の道のりを記憶する地球史の顕著な見本である。

- ( ) 小笠原諸島では限られた面積の中で独自の種分化が起こり、数多くの固有種が見られ、特に陸産貝類や植物、昆虫類においては、今なお進行中の進化の過程を見ることができる。これらは他の多くの海洋島では失われてしまったものであるが、小笠原諸島では数多くの研究が実施されている。

中でも陸産貝類は 95 種（固有種率 93%）が確認され、現在も新種の発見が続いており、7つの固有属があることが知られている。カタマイマイ属では樹上性、地上性などの生態型により形態変化が見られ、化石種も含めて、過去から現在までの進化系列や種多様性の歴史的変遷を追うことができ、適応放散による種分化の典型を示している。



乾性低木林には、東南アジアや沖縄の照葉樹林の構成種に対応する固有種が見られることから、照葉樹林の構成種が海洋島である小笠原諸島に到達した後、乾性な気候条件に合うように適応進化したことにより成立したと考えられている。ただし、大陸で優占するシイ・カシ類を欠くため、その種組成は独特の内容となっている。また、適応放散により生じた固有種が数多く見られるとともに、雌雄性の分化や草本の木本化など、海洋島独特の進化様式も観察できる。

昆虫類では、オガサワラカミキリ属やヒメカタゾウムシ属などで進化の過程についての研究が進められている。

このように、小笠原諸島は適応放散による種分化の過程を保存している「進化の実験室」であり、重要な進行中の生物学的過程を代表する顕著な見本である。これらによって、小笠原諸島の特異な生態系が形成されている。

- ( ) 小笠原諸島は多様な起源の種が混在しているのが特徴であり、植物では「オセアニア系」、「東南アジア系」、「本州系」などが知られている。それらが独自の種分化をとげた結果、小さな海洋島でありながら種数が多く、固有種率も高い。前述の陸産貝類の他、乾性低木林を構成する植物では69種（木本のみでは54種）の固有種が確認されており、固有種率は67%（木本のみでは81%）である。

また小笠原諸島は、オガサワラオオコウモリ(CR)、メグロ(VU)、シマアカネ(CR)、カタマイマイ(DD)など IUCN レッドリスト記載種 57 種のかげがえのない生育、生息地となっている。鳥類では固有種メグロにより、BirdLife International の固有鳥類生息地域 (Endemic Bird Areas of the World) に指定されている。また、北太平洋に分布するアホウドリ類 2 種と、カツオドリ類、アジサシ類等の亜熱帯性の海鳥 12 種が繁殖している。

このように、小笠原諸島は世界的に重要な絶滅のおそれのある種の生育・生息地であり、また、太平洋中央海洋域における生物多様性の保全のために不可欠な地域である。

### 真正性または完全性:

小笠原諸島は、海洋性島弧の形成過程をその誕生から幼年期を経て現在進行中の青年期まで観察できるとともに、海洋島における生物の進化の過程を良く保存し、世界的に重要な絶滅のおそれのある種の生育・生息地となっている。登録推薦予定地域には、上述の顕著で普遍的な価値を構成する要素のすべて、また価値を維持するのに十分な範囲が包含されている。

登録推薦予定地域（及び緩衝地帯）は、国内法等に基づき、国立公園、原生自然環境保全地域、森林生態系保護地域、国指定鳥獣保護区等の保護区に指定されており、長期的に適切な保護を受けている。また、当該地域に生息する生物の一部は天然記念物や国内希少野生動植物種の指定により保護されているとともに、固有種の保護増殖事業が実施されている。

また、上記保護区を所管する各機関や地元自治体、関係団体からなる地域連絡会議

と、保護管理等に科学的な見地からの助言を行う科学委員会が設置されており、登録推薦予定地域全体の管理計画を作成する予定となっている。

さらに、「特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律」に基づく外来生物防除事業等、関係機関の連携により外来種対策に取り組むとともに、「東京都の島しょ地域における自然の保護と適正な利用に関する要綱」に基づき、都と村の協定による利用ルールが策定されるなどの取り組みが進められている。

### 他の類似物件との比較:

海洋性島弧の誕生と無人岩の発生は、地球史上において幾度となく繰り返されてきた普遍的な現象であるが、その多くは地殻変動によって破壊され、断片的な記録しか残されていない。しかし、伊豆 - 小笠原 - マリアナ弧では 2500 km にも及ぶ長大な海溝に沿って無人岩海底火山が地殻変動による破壊を受けることなく保存されている。残念ながら、そのほとんどは容易に人が近づくことを許さない 3000m を超える深海にある。唯一小笠原諸島のみが、無人岩に代表される海洋性島弧の誕生から青年期に至る成長過程を陸上で目の当たりにすることができる世界最大の模式地である。

海洋島の特徴を維持し、生物進化の過程を示す既存の自然遺産には、ガラパゴス諸島(エクアドル)を初め、ハワイ火山国立公園(アメリカ)、アルダブラ環礁(セイシェル)などがある。小笠原諸島は、ホットスポット起源や環礁起源のこれらの海洋島とは起源が異なり、その形成年代も古い。また、ガラパゴス諸島がほぼ「南米系」のみの起源であるのに対し、小笠原諸島は「オセアニア系」、「東南アジア系」、「本州系」と多様な起源の種が混在しているのが特徴である。これらの地域と比較すると小笠原諸島の島々ははるかに小さいが、固有種率の高さはこれらの地域に匹敵し、単位面積当たりの在来種数は高くなっている。

Udvardy の生物地理区分によれば、小笠原諸島と同一地理区に属する既存の自然遺産地域はない。同地理区分内にマリアナ諸島(米国)があるが、北マリアナは小笠原諸島よりも新しく隆起したため生物種の多様性は低い。南マリアナは小笠原諸島と同時期に形成された島弧であるが、サンゴ礁に覆われ地形や地質を十分に観察することは出来ない。また、開発が進んでおり、小笠原諸島のような海洋島独特の生態系は失われている。

以上のように、小笠原諸島と同様の価値を有する地域は他に存在しない。